

## 母と祖母 く母の日に寄せてく

恐縮ながら、今月は私の誕生日である。誕生日が近付いて来ると、なぜか決まっ母を思い出す。母を思い出して何か特別なことをする訳ではないが、近年は感謝の言葉を伝えることが恒例となっていた。私は母が好きである。けれども、母は自身の母、祖母の事があまり好きではなかったようだった。我が家の菩提寺で開催している「御詠歌の会」に参加するまでは。

「本当に、そっくり」。初めて参加した『御詠歌の会』でお寺の本堂に入ってきた母を見て、一人の老婦人がそう言った。思いがけず祖母の実家と同じ村の方に出会った母は、声を掛けてきた老婦人に手を重ねられ、次々と口から紡がれる昔話を黙って聞いていた。そして、祖母が明るくお茶目な人であったとの話題で「ハハハ」と笑った。すると、「ほら、その笑いかた、本当にそっくり」と返された。なぜ母が笑ったかといえば、照れた訳ではなく、祖母が明るくお茶目で

あることに合点がいかなかったからである。

祖母は農家であった祖父の許へ嫁ぎ、母を含めた4人の子を産んだが病弱であったという。母が10歳になる頃には、一日中寝間着のまま床に臥せていたそうだ。

母に声を掛けた方は幼い頃から祖母を知っており、祖母のことを話す時は本当に楽しそうに、冗談を言い合ってよく笑い転げたと言う。そして、母をまじまじと見ては「あんたといると、あんたのお母ちゃんと一緒にいるみたいで嬉しいよ」と、度々言っていた、と聞いている。

私が母から聞かされていた祖母は、何も出来ない自分を恥じて頼りなく、いつも申し訳なきように生きた人であった。けれども、還暦を過ぎた母が出逢った祖母は、生き生きと活力にあふれていた。

祖母は母が中学三年生の時、42歳で他界したが、母は祖母を居なかったものとして生きてきたと言っていた。昭和20年代、人の手だけが頼りの農家に長女で生まれた母。現代にあるような農機具などはなく、自身も未熟ながら働き手として、さらには

幼い弟妹を抱え、歯を食いしばりながら強く生きるしかなかったのではないかと思う。

母はこの話の終わりに「自分の生き方は全部自分で考えて、自分だけの力で生きてきたつもりでいたけど、母に顔や体付きの似た私が選んできた人生には、いつも母と一緒に居たんだろうね」と私に語った。

私自身、「ありがとう」と感謝の言葉を心から母に伝えられたのは成人を過ぎてからであるが、複雑な想いを抱きながらも必死に生きていた多感な時期の母は、心からこの言葉を祖母に伝えられただろうか。

今、我が家の佛壇の隣には、手先が器用であった母お手製の五月人形が飾られている。ガラスケースに入った小振りの五月人形だ。毎朝佛壇に手を合わせる度に視界に入る人形を見ると、「お金が無かったから」と口にしながら申し訳なきようにしていた母の姿を思い出す。

お母さん、ありがとう。

お祖母ちゃん、ありがとう。

